

名誉館長館話実施報告抄

新野 直吉*

高橋 萬年・木村 文助・下田憲一郎

はじめに

平成25年度は、前期に5月10日(金)「阿弔流爲と背景」、同24日(金)「元慶の乱と信仰」、6月14日(金)「清原氏の存在意義」、同28日(金)「安藤(東)氏の来秋」、7月12日(金)「高階鞞負の実像」、同26日(金)「戊辰の戦乱と久保田藩」の6回を実施し、夏を経て後期に、先覚について9月13日(金)「高橋萬年」、同27日(金)「木村文助」、10月11日(金)「下田憲一郎」を行い、さらに10月25日(金)「布伝能麻迹万珥」(7)、11月8日(金)「同」(8)、同22日(金)「同」(9)の菅江真澄の随筆に関する連想を試みた。ここでは先覚に就いての3回分を、文章化して報告する。

高橋 萬年

明治30年(1897)12月21日に秋田市上川口において、製材業を営む父が吉と母サダの次男計治として、後年の萬年画伯は誕生した。長男の兄貞治は、後に為吉を襲名する。なおその後妹のトミとツネが誕生するので、4人兄弟姉妹の家庭環境となる。明治37年(1904)4月1日旭尋常小学校に入学する。旭尋常小学校の後身は旭北小学校であるが、当時は高等科はなかった。それで同41年3月24日に修業すると、4月1日に中通尋常高等小学校5学年に進入学して、同43年(1910)3月28日同校を卒業した。当時義務教育は明治40年までの小学校4年間の制度だったので変わって、尋常小学校6年までの義務制に同41年から高められたのであった。そして計治少年は更に同43年4月4日明德小学校の高等科に進入学したのである。大正元年(1912)3月義務教育を超えた高等小学校卒業の学歴を得たのである。

だがこの大正元年高橋家は火災のために家も工場も家財もすべて失ってしまい、上亀ノ丁25に移転。製材・挽木屋の続行だけでなく釣具屋も営

み、彼計治は電気会社の給仕に就職した。昼は勤め、夜は家の仕事である加工欄間の彫刻下絵書きを手伝う生活の中で、川反の絵師小川歎斎を知って、画家を目指し、上京しようと決意することになる。上京して学習することに親族一同は強く反対したという。だが本人の意志は強く、大正2年(1913)7月父に伴われて上京し、小石川の関口町に寺崎廣業画伯邸を訪れて入門を願い出るのである。滞在先は港区芝の叔母の家であった。なお秋田出身の寺崎画伯は、時に東京美術学校教授で、12月には日本画科の主任の地位に就く。

7月21日に正式に入門を認められ、内弟子となって住み込み書生の生活を送ることになる。画師の修行としては「絵の具」を溶く仕事が主であった。そしてそれは後年自らの作品を描く段になって、作業の成果が表われたと伝えられている。

大正3年7月中旬に長野県下高井郡平穏村の上林温泉に寺崎教授の別荘「養神山房」が完成する。そこで高橋が絵筆の運びを師から教えられている写真も伝わる。なお後年別荘は曹洞宗の長寿山廣業寺となる。信州に別荘を設けて生活の潤いと充実を求めた秋田の先覚に、須磨弥吉郎がいたことをここで思い起こしたのは、偶然であろうか。

大正4年(1915)1月21日、師廣業教授から、「萬年」の号を授与された。それは廣業画伯が上田萬年博士を崇拜していたことに依るといわれている。上田博士の萬年は「かずとし」で本名であるが、高橋が与えられたのは画伯雅号であるから「まんねん」なのであろうが、上田東大教授は慶応3年(1867)生まれの言語学者であり、寺崎東京美術学校教授は慶応2年生まれで同年代で1年画伯が年長であるが、何等かの理由で画伯が上田博士を尊敬することがあったのであろう。

だがこの号を得た年の苦渋として体調不良が襲って来た。師の身辺多忙で雑用に追われて健康

*秋田県立博物館

を損ねたのだという。兎に角秋田に帰って静養することになる。しかし単に休んでいたのではない。古代風俗を画題にした「菊慈童」などを描いていたので、図書館通いなどをして中国の古風俗考証を学んでいた。師廣業は大正7年(1918)4月に「帝室技芸員」に任命される。弟子としても荣誉感を得たに違いない。この月に発行の『天籟画塾塾員名簿』の塾員169名・塾友42名の総員の中で、数え年22の萬年は塾友であった。4月3日から29日にかけて東京竹ノ台陳列館で行われた「天籟画塾第2回絵画展覧会」に「清正公」を出品した。

大正8年には重大な変化が起こった。2月21日に師寺崎画伯が午後3時55分に逝去したのである。まだ54歳であった。喉頭癌による病死で、24日の浅草総泉寺における葬儀には2千数百人の会葬者があった。大正10年(1921)10月1日には父爲吉が56歳で世を去った。いわば公私共に独自性発揮の時期を迎えたということになる。

大正12年(1923)9月第10回院展に「新月橋の雨」が入選する。初入選であった。数え年で27歳いよいよ本格的に萬年画伯が世に出たことになる。だが第一日目にあの大震災に遭い会は閉じられ、秋に大阪で開かれる。前年に秋田人では六郷町の小西正太郎がパリに留学し、続いてこの12年に角館町の渡辺浩三がパリに留学するというような画伯達研修の時でもあった。昭和28年からの数年渡辺画伯とは将軍野の秋田市立高校で原則毎週顔を合わせ、親しく会話させて頂いたが、どうしてかパリでの話はされなかった。萬年画伯は大正末年は在郷で活動、14年には秋田魁新報紙上で連載物「牧場の歌」の挿絵を担当した。

昭和2年(1927)何か恋愛問題などで悩み、心荒む日々をおくっていたらしく、案じた友人の清水蔵吉・奈良環之助らの励ましを受けて再度上京することになり、3月15日秋田を後にした。東京では下谷区上野桜木町36星谷家に下宿し、制作に励んだ。郷土の友清水等は生活費を月々送金したというから秋田人の友情に感じ入る。9月3日から10月4日にかけて催された東京美術館における第14回院展には、「新橋」「永代橋」「日本橋」「駒形橋」の4画題を描き、「永代橋」で5年ぶりの入選を勝ち取った。院展の期間中に母サダも上

京、院展はじめ東京の案内を受けたという。互に満足し合ったに違いない。

昭和3年春第13回院展試作展に「坂」入選。体調不良で帰秋したいというような便を書いたりして、清水後援者の上京しての励ましを受けたりしたが、秋の第15回院展には「浅草」など3点を出品する。翌4年3月の第14回院展試作展には「雪の街」を出品「正に降雪の状」との好評を得て入選した。この年は一時帰秋はしたが、翌5年(1930)秋の第17回院展には「田園の秋」で入選し「院友」に推挙された。八橋附近に取材した作品であったという。秋に改めて上京し、渋谷に下宿したが、年末には東京市外の上目黒に下宿を替えた。6年の春第15回院展試作展には「菊」が入選したが、雅号については「計年」なる本名と文字の通ずるものも考えたというが、殆ど使用はしなかった。昭和7年2月20日信州に向かう。21日の師廣業の14回忌に門人一同と上林の師の菩提寺に至るためである。

この昭和7年には極めて重大な慶事もあった。4月末に秋田で友人石井亮佐の姉明子と結婚する。5月上旬帰京世田谷区池尻408に移住。秋の第19回院展には「田園のお昼」が入選し、翌8年4月から5月にかけて第5回秋田美術展(東京は三越、秋田は魁新報社講堂が会場)に「鯉」を出品した。秋の第20回院展には「種蒔くころ」を出品入選。この年には生家の菩提寺の檀山の仰信寺で「四季草花図」なる襖絵を描いた。

昭和9年(1934)4月から5月の第6回秋田美術展(魁講堂)に「おぼこ踊り」出品。「魁新報」連載の青江舜次郎「海につづく国道」の挿絵を描く。10年4月末から5月初の第7回秋田美術展(魁新報社ギャラリー)に「牡丹」を出品。11年4月第1回日本美術院院友展(松阪屋)に「おぼこ踊り」が入選。同じ頃の第8回秋田美術展には「竿燈」を出品。秋の第23回院展(府美術館)に「鯛売」出品入選する順調で充実した活動が続いた。

だが一方この芸術家には東京暮らしにおける体調不良ということがまつわりついていたようである。或いは愛郷という心情が強かったのかも知れない。昭和12年(1937)秋田市下米町2丁目に、稲金料亭の持家である建物を借り受けて、秋田に

転居する。この年4月から5月にかけての第9回秋田美術展には「川反の舞妓」なる秋田麗人を対象とした作品を描き出品する。秋の第24回院展（府美術館）では「花賣」が入選した。この時期は、藤田嗣治画伯が平野政吉家土蔵で、あの大作「秋田の行事」を描いた頃に当たっている。

最初の弟子といわれる川村信虎が入門したのもこの頃で、「萬年は彼の技量を認め、自らの後継者として将来を期待していたという」（秋田県立美術館・平成10年刊「高橋萬年の年譜」）とされる程の門人は、戦時のこととてやがて軍隊に入り出征し、中国戦線で戦没してしまう。昭和13年4月27日「秋田陸軍病院」への秋田美術会員の慰問では「鎧」の色紙を寄贈した。秋の第25回院展では「田植」が入選した。上京の際「鎌倉国宝館」を訪ね多くの古仏を観賞した。昭和14年（1939）3月、中国に渡るべき「従軍画家」に加わることの要請を受けるが、身体虚弱を理由に応ずることが出来なかった由で、若し信念上の決意に基づく行動なら別であるが、そうでなければ辛い決断だったに違いない。画伯は3年がかりでの構想で昭和18年2月に「平田篤胤像」を完成し、7月には第4回秋田美術同人展に「大楠公」を出品しているという時局認識者であったからである。なお17年秋の第29回院展には「落穂拾い」が入選。18年の第30回院展（都美術館）には「田草取り」が入選、次回展無鑑査となっている。

昭和19年（1944）10月の第1回軍事援護美術展（日本橋三越）には「正成」が入選しているが、翌20年の院展小品展（同じく三越）は終戦後の11月が期間だったので、「雄渾」を出品し入選している。愈々戦後社会の美術界となったのである。

昭和21年数え年では50歳に達しているが、春に新屋青年学校教員の小玉康一郎紹介による、日新小学校教員横山津恵の入門があった。6月には中斷していた秋田美術展が再開されることになり、第11回展に萬年は「梅」を出品した。9月には第31回院展（都美術館）に「野山柴」を無鑑査出品する。11月日本画家協会創設に伴い秋田県支部設立、高橋萬年理事長となった。12月には県内日本画家の「有象社」が誕生、第1回展（本金三階）が催され当然萬年も同人参加をし、翌22

年には第2回有象社日本画展（同）が開かれ萬年と弟子の横山も参加した。昭和23年（1948）春武埜三山会長のもとに秋田県総合美術連盟が、日本画・洋画・彫塑・工芸・書道及び篆刻・写真の六部門にわたって結成された。萬年は連盟委員となった。4月には第3回有象社日本画展（本金）が、9月には第1回秋田県総合美術展覧会（記念館）が開かれ、その審査員となり、「雪月花」を出品。また東京ではこの月第33回院展（都美術館）に「文殊」を出品入選。12月には館岡栗山・井川恵義と三人で結成の燐友会の第1回展が開催され萬年は「兎」「リンゴ」「小犬」を出品。

昭和24年（1949）4月第2回燐友会展に「村童圖譜三點」出品。5月に「寺崎廣業名作展」があり、その初日の「廣業の芸術を語る」座談会に出演。9月第34回院展（都美術館）に八橋の果樹試験場に取材した「葦菓」入選。昭和25年下米町2丁目38-3に宅地を購入し自宅を新築転居。26年9月第36回院展に「田」を出品入選。この際院展に「少女」を出品初入選の弟子横山津恵を導き上京、院展鑑賞の上、長野県上林の長森山廣業寺に亡き師を偲び、号泣した。12月に館岡・横山と新たな燐友会を結成、魁講堂で展覧会を開いた。昭和27年（1952）1月2日萬年宅の恒例書き初の席上、かねて入門を願っていた齋藤英壺が入門を許可された。6月第5回秋田県総合美術展覧会の審査員になり、「鯉」を出品。9月第37回院展に「田家」入選。28年9月第38回院展に「農家」入選と活躍を続けた。

昭和29年（1954）5月26日母サダ82歳逝去の悲しみがあつたが、6月上旬の第7回秋田県総合美術展に先に入門の齋藤英壺が、秋田銀行本店を描いた「街景」を出品し、市長賞である特賞を受ける慶びがあつた。師として門弟の取材場所を何度も訪れ指導した成果であつた。9月には第39回院展に「午睡」を出品入選した。弟子の横山津恵も「陶家」を出品して入選し、日本美術院院友に推挙された。この頃であろうか、上に触れた渡辺浩三画伯が、秋田大学の美術科の教官である葛西教授（洋画）や、同じくもう秋大勤務であつた横山教官の画業について、何か語られたことがあつたが、美術に無芸の当方は対応の論もできず、

今はどういふ話だったかその内容も記憶にない。

昭和30年になると2月頃から体調不良となり、病床に臥することが多くなった。翌31年春に院展出品作品の「朮すり」制作にかかったが結局はこの作品が絶筆となったという。一方身近な門弟横山は文部省内地研究員として、東京芸術大学日本画科に学ぶべく上京、前田青邨の教室で研鑽していた。8月10日慢性気管支拡張症のため万年画伯は自宅で逝去する。享年59。16日榎山登町の迎信寺に葬られる。9月13日明子夫人を囲み知人門弟19名が「万年画伯を偲ぶ会」を画室で行った。昭和33年9月に秋田市美術館で「高橋万年遺作展」が開かれ、同41年(1966)5月には万年堂建立記念展が館岡栗山代表の万年会主催で木内一階を会場に行われた。万年堂は6月10日河辺郡河辺町七曲台に完成し、明子夫人が遺作などを守りながらここに住居した。

昭和54年(1979)6月下旬夫人は81歳で世を去ったが、4年後の昭和58年7月には秋田市美術館で「高橋万年遺作展」が27日間催されたし、平成になっても10年(1998)3月から4月にかけて「あたたかになつかしく 高橋万年の画心展」が秋田県立近代美術館で1ヵ月行われるなど、郷土で活躍の日本画家の業績は評価され続けている。

木村 文助

明治15年(1882)6月25日、北秋田郡落合村李岱字李岱4番地で、農家にして麴屋をも営む父の徳之助と母のタツの次男として文助は誕生した。しかし不幸なことに母は産後に病没したため、分家になっていた叔父の木村永治夫妻に引き取られて育つことになった。それはたまたま叔母が出産した子を失っていたことも背景になっていたと考えられるが、ものごころのつく頃に主人公の心境にそれなりの影響はもたらしたかもしれない。

長男の不二男が、「北海道教育評論」の昭和35年3月号から、昭和36年6月号までの13回にわたり「絶対他者」を求めて—ある新教育徒の生涯」を連載したが、そこで「親がわりの永治は、その顔もとびぬけて『めごい』文助を、じか肌におぶって草を刈り、それはなめるに近いものであった。いったいに秋田人の情の濃密さは、猫に近いので

ある。ふしぎなのは、この子はほとんど他の子とは遊ばず、部屋のすみで、あてがわれた紙と筆で何やらかいてひとり楽しんだ」と書いている。

そして不二男は「父母のこと」(『文学的自叙伝』)という文の中では「彼は三人兄弟(兄・姉)の末っ子で、生まれてすぐ母に去られ、これを逆にした立場の生まれた子に死なれた若夫婦にひきとられてその幼年時代をすごした。彼は後年この親代わりの夫婦の墓をつくってやったというのも、ひとつは子孫が死に絶えたからである。」と解説しているが、実は生まれた家も「木村文助の実家(生まれた家)は、現地では絶家になっており、木村家の分家はかなり多いが、ごく近親の人は見られない。二、三、問い合わせてもさっぱり腑におちないので、木村文助の実家から嫁に出た家(同じ合川町に二軒ある)を訪ねてみたい。」と畠山義郎『村の綴り方』の中にも見え、北秋でもこの「木村家は長く名主とされたこともある旧家であった」と前記の連載文中で不二男の書いていた伝統ある家のことは判然としないのである。

だが追い求めてみると、後にも見る『北海道生まれの作家』所収「父の肖像」の中でこの長男が、「秋田で中流の農家であった彼の生家は、かたわらこうじもやっていたので、裕福なほうであったが、そのむろから火をだして、一度は丸焼、二度目は半焼、これがもとで父の兄一家は十勝へ移住した。帯広郊外の大正村がそれで、文助の兄が草分である。」と述べる箇所がある。北海道には大正の地名が北見にもあり、大正期に開かれた新天地という地名であろうが、帯広の「大正」が地名辞典などで見ても最も顕著充実のところと見受けられる。「草分」と書かれるからにはこの地への早い移住者の中に含まれているのであろう。

実は別にも記す如く文助は若くして妻を失うが、その時数え年9歳だった長男の追憶では、「父を向うにして、理解と和解の日を持つことなく早く死んだ、私の生母であった。」と認識されていた。そのような認識を導く状況が文助自身にも当然あったのであろうと判断されるのである。

文助の育った地に関わる記録で、この長男の記した文献には、「父ほどには貧乏を知らずにすごしてきた私だったのである。次にいつのものかわ

(か) らない、彼の残した古記録、寺が記入されており、明治初代と察しられる。〈北秋田郡落合村李岱 高二百四十石七升六合、… 四、田水堤、家居七十戸、人三百六十口、馬百頭、社地八幡・愛宕・稲荷三社共に杉あり、妙覚寺、山伏除く、川向に羽根山支郷あり、家十五戸、人七十八口、馬十二頭。〉これが父の生い立った村の概略であるが、耕地の全面積は見られない。だが注意されるのは『二百四十石七升六合』という、実に零細にわたる数字である。『合』まで示された数字から、上は税金その他（佐竹藩時代から）、下は人口の自然膨張、さなからメ粕にされたような貧弱の農民生活というものがのぞかれてきて、さればこそこの『貧乏物語』であったと知らされる。」（木村不二男『北海道生まれの作家』昭和45年1月1日山音文学会刊所収「父の肖像」）とある。父と子は23歳の年の差なので、観察や考察には実証性があると認められる。

明治22年（1889）4月に文助は李岱尋常高等小学校に入学したと考えられるが、この学校は北秋田郡で2番目に開校された伝統校だという。後には合川西小学校となる。文助は学齢期になると実家に戻ったが、彼を産まなかった継母は、他家に育った文助に冷たかったと次男の楠雄はいう。（「私のなかの歴史」・「北海道新聞」1992年12月3日夕刊）小学校高等科を卒業した文助は、優秀なので飛び級卒業だったという。役場の戸籍係に年齢を一つ多くしてもらい、明治30年に満16歳ということで秋田師範学校に入学したという。（この点畠山『村の綴り方』では「うわさされているが、詳細は不明」となっているが）上記の楠雄の話は父から聞いたことに基くと判断されるから事実であろう。長男不二男の記すところでは「アルバイトの連続」だったという（「父母のこと」）。

明治35年（1902）4月師範卒業。北秋田郡下川沿村川口小学校に勤務し、訓導で教頭職を兼ねた。新卒が教頭とは不可解であるが、一時代前には師範出の新人教師内藤湖南が綴子小学校で、校長職というべき首席訓導であった。要するに師範学校という新制度尊重文教政策の表われである。

明治37年（1904）北秋田郡釈迦内村釈迦内小学校教頭に転任する。そこで翌38年大館町の青

柳謙治とノブ夫妻の長女千代と結婚するのである。そして翌年、既にその著述をも引用した長男不二男が誕生する。長男は「私は初孫で、五つの時まで大半、母方の祖父母のもとで育てられたが、この落魄士族は早くいえば三度の食中も、父を憎む教育をしてやむことを知らなかったようで、これは明治末の深い社会的真因にもとづく。… 祖父の生まれた秋田佐竹藩の城下町大館は… 下に見下した階層がいつかとして変っていたのである。父の『先生』がそれである。当時先生というのは社会を見下した立場である。」と書き、更に「二番目の叔父は当時十七、八、… 士族としてはこれほど屈辱的なものない町名、お足軽町の空屋然とした祖父の家に二階に小さな工匠をつくって、中学にもいけず、内職の魚釣針をまげて両家合計八人の大家族の一家を助けていたが、彼が退くつになるとよくこの幼童をからかうことばが『ブンケコッコ、ブンケコッコ』というやつで、それは文助の子供という意味、… 五才の子供はもちろん何も知らず、小さなこぶしをかざしていつもえへらえへら笑ってばかりいる叔父にかかっていったものである」と述べている。笑いながらの所業は愛情表現だったのであろうが、幼児当人は「からかうことば」と感じたのであろう。

更に続けて「仲人による父母の結婚が成立してからしてもう円満であろうはずはない、極言すると呉越同舟のその舟、そこで私という子供、および孫は、対立的な没落士族と、頭をもたげ初めてきた農民階層のあいだにかけられた橋、右すべきか左すべきか、しばしば方途に迷わされた。」と書く。そして母親についても「母は長女で我侬いっばいに育ち、賑か好きであった。彼女の少女時代まではまだ家は没落しておらず、それが急転に及んだところで、父との結婚となったのだが、この初孫は、父の悪口と、その実家の悪罵をどれだけ祖母の口からきかされたことか。あんなにわる口をいわれつつも、祖父の葬式などでいってみると、話がてんでちがうので、どうもおかしいと小さな首をかしげたことであるが、すでにこのとき幼童は、没落の士族階級と、農民階層とのあいだをやりとりされていたのである。且つ前者には濃厚な嫉妬の血が一様に流れていたようであるが、後

者にはそのようなものがかけらもなく、これがわかったのは大きくなってからのことである。」と、母と母方親族のことを記している。

引用しているのは、長くなったので改めて示すと「父の肖像」であるが、上の母方評の続きというべき部分に、「話を転じ、もし私の生母にいま少し寿命が与えられたら、二人の対立も大いに角が去られたにちがいないと思う、喧嘩しつつも華やかずきで、『不如帰』の浪子の運命を自分のそれかのように観じていた母が、父上京の節、これの作者の徳富蘆花に逢ってくるようにそそのかしたのも私が小学二年生頃の彼女であった。私は蘆花に逢ってきたと語り告げたときの母のはればれしい顔を忘れることができない。島村抱月の芸術座一行が青森にきたとき、その松井須磨子の『復活』を見にいかせたのも彼女である。父はこのようなことはみな忘れ果てていたようだ。…母は数え年二十七で去ったのであるが、その一切が子供、私に移された形であった。母は父の眼をぬすんで私に紋付と小倉のハカマ、久留米ガスリのあわせを長いあげをして残していった。自分の短命を察した彼女が大きくなるまでこれが着られるようにとの考慮がふくまれている。ハカマもカスリもじつに丈夫、高等科卒業まで着られた。このようにして、死んでも子供をかき抱く母、私には死なぬ母となったのである。…母が死んでから、私はこれまでの、母の肩をもつ（けんかすると父にかかっていった）どころではない、父とまったく対立的な自分になっていた。」と述べるのである。

この長男が生まれてから、大館女子尋常高等小学校教頭を経て43年（1910）阿仁合尋常高等小学校教頭に転任する。この年12月8日に次男楠雄が生まれる。明治44年（1911）北秋田郡真中村真中尋常高等小学校長になる。長男にはその時の文章もある。「私は明治の最後の年、四十五年（この年大正と改元）数え年七つで、父が校長していた七学級の北秋田郡真中小学校に入学したが、当時の私の印象では、彼は難しい顔をして（その頃はやりのヒゲを生やしていたからなおそう見えたものらしい）、部屋にとじこもっては、教師生活の余暇の一切を読書にうちこませていたようだ。カント、ヴントの心理学、ロシア文学、はては漱

石と…、どうやらその月給の半分がそうした本代になった様子、「おれは豆腐のおからばかり食っているが本はよく買うぞ」と、生徒の前で豪語した。その頃の月給は二十円ぐらいか。長男の私は母によく二銭銅貨を握らされ、そのおからを買いにいかされたので、それを高等科の生徒からまた聞きして穴があつたら入りたい気持であった。」（「父母のこと」とあるから、低学年時から父校長にあまり親愛の情は持てなかったのであろう。

校長として「綴り方教育」も含め新時代の学校経営を進めようとしていた大正2年（1913）千代夫人が流行性脳膜炎のため亡くなる不幸に襲われた。弟の楠雄は「母の千代子は兄の不二男八歳、私が三歳の時に二十七歳の若さで亡くなり」（「私のなかの歴史」と語り、兄の不二男は「私の幼少時代の幸福は母の死によってひっくり返された。母の亡くなった後には私のほかに、母の顔もよく知らない数え年五つの弟（楠雄）がいた。私が父にしんから愛されたのは、義母（母の妹）がくるまでの一年足らずの間であったろう。『これにお母さんの思出をかいておけ、後になると忘れてしまうからな』と、父は云って上手に手作りのノート（父は手工がとてもうまかった。これも例のアルバイトの名残りであろう）の表紙に「思出の記」と書いて私にあてがった。当時から綴方（作文）教育に関心を持っていた父は、子供にもものごとをよくよく注意して見ることをくどくどと云いきかせた。」と書いた。

だが次の條で「父はこの真中村から阿仁の奥の学級数もはるかに多い前田という里への転任後、一生の危機に遭遇した。この時六年になったばかりの私は、運命というものの恐ろしさに身ぶるいした。故あってこれを語るのをさけるが、私はこの危機にあった父をしんからいとしんだ。この父の逆転こそはトルストイを耽読するだけが楽しみ。彼に、あまりにもむごいものであったから。父はそのことあって郷里である落合村の姉の家に私と弟を托すと、職を求めて、当時松前といわれていた北海道に、まさに『石をもて追わるゝ如く』にして渡った。」と記している。

更に「父の新しい職は創設間もない函館師範の書記心得であった。初代校長、和田喜八郎先生が

彼の秋田師範時代の恩師に当たっていたのである。大正六年の春のことである。私と弟は阿仁川の舟大工である成田という伯母の家に預けられ、学校にも通わず過ごした。…でもその年の夏休に、父は函館から二人の子供を迎いにきてくれた。それで私は生まれて初めて海を見、その海を渡った。私は小学校六年の時にはじめて渡った海がいまもはっきり見えてくる。」(『文学的自叙伝』山音文学会刊)と確かな記憶力を示している。

和田校長のことは平成13年の館話で、前後が平福百穂と石川理紀之助の両先覚という順序で話したことがある。同じ北秋田郡の鷹巣に明治5年(1872)に生まれた和田は文助の10歳先輩で、文助が師範に入学した前年の29年から東京高等師範学校に進学しているが、高師を卒業してまだ彼が在学している明治33年4月から母校秋田師範学校に赴任しているから、2年間は北秋を同郷の地とする師弟関係であったことになる。36年4月休職して東京高師の研究科に進んだ和田は、有名な秋田出身の狩野亨吉第一高等学校長のすすめで清国四川省成都の高等学堂に4年間在勤し、40年(1907)に帰朝、41年5月愛知県第一師範学校教諭兼舎監に就任、立派な風格で「超凡の趣」がある精英教師であった。

大正3年(1914)2月3日数えて43歳で新設の函館師範学校初代校長になったのである。5年に創設した附属小学校に達子勝蔵・池田忠男ら秋田の優秀教員を招いたのであり、その一連の人事で文助も招かれたのである。畠山『村の綴り方』では「一九一七年(大正六)、函館師範創立時の事務長」とあるが、資料認識が直接的であろうと考えられる長男の表現では「師範の書記心得」となっているので、初めから事務長ではなかったであろう。尚和田校長は8年12月に沖縄師範学校校長に転任になる。そして文助は渡道翌年の7年7月31日亀田郡大野尋常高等小学校訓導兼校長に就任する。五級俸50円であったという。北秋田の綴り方校長がいよいよ北海道の綴り方校長になったのである。

渡道する前の身辺のことであるが、大正2年に千代夫人の没後、幼児もいたことからであろう、青柳家と協議して、翌大正3年(1914)に千代夫

人の実妹八重と再婚する。『村の綴り方』には「八重は、一八九五年(明治二十八)四月一日生、文助とは数えて十四年下。」と記し、夫妻間の年齢の開きを特記している。そして続けて「この年、秋田魁新報に『蘆花先生を訪うの記』を掲載。」と記している。上述の長男の表現では上京する父にこの訪問を「そそのかした」のは母千代であった。「綴り方」に卓越の教育活動を示した主人公の生活は、北海道に渡ってから形成されたとしても、基本の方針や活動の素地は秋田で確立されていたことが理解できる。

大正4年(1915)には長女のみやが誕生した。渡道した大正6年の10月24日次女せいが誕生するので、2人の娘を持つことになる。なお三男の裕が生まれるのは大正9年(1920)4月1日のことである。関連して記すと、四男伸は同11年10月7日の生まれ、三女れいは14年3月27日の生まれ、四女ていは昭和3年(1928)5月6日の生まれ。さらに10年(1935)6月20日五男好誕生となる。若い母からも順調に子供が生まれたわけである。そしてその子供らと、北海道の教育者として文助先生は地歩を明確にした。

長男不二男は大正10年4月函館師範学校に入学。14年卒業して石崎小学校訓導となり、次男楠雄は昭和5年函館師範学校卒業伊達小学校訓導となり父子共に学校教育界で活躍することになる。

文助校長は昭和3年6月茅部郡砂原尋常高等小学校訓導兼校長。7年(1932)『悩みの修身』(厚生閣書店)出版、その教育理念を明らかにする。高等官七等待遇、従七位となる。10年(1935)戸井村日新尋常高等小学校訓導兼校長。北海道綴り方教育連盟結成。秋田にいる時から生活綴り方に親しみ、大野小学校時代から「赤い鳥」に綴り方を送稿し、綴り方学校として名を上げ、昭和5年長男等と共に、函館で鈴木三重吉と一緒に写真もある彼のことであるから、北方綴り方教育に活躍したが、昭和6年の砂原へ転任の段階から、自由主義危険思想という点から道視学の命による転任であったという。昭和12年「国民精神総動員運動」が起こると、彼の立場は一層苦しくなる。

昭和13年(1938)視学の勧告により未だ満56歳で三級俸(135円)の日新小学校校長を退職。

恩給は年750円で森町森川町に借家住まいをする。15年に綴り方教員の全国的検挙が行われた際には退職後で問題なく、翌16年秋田師範同窓の加勢蔵太郎の手引きで札幌一中夜間部昭和中学の国語・作文の教師として単身赴任した。留守宅では夫人が指圧で生計を支えていた。3年間の明るい生活の後昭和中学の庁立二中夜学との合併に伴い、退職し森町に帰るが病弱の身となった。昭和28年(1953)12月11日脳溢血半身不随状態で逝去行年72。

下田 憲一郎

明治22年(1889)12月11日平鹿郡横手町大町中丁11番地に、父源之助と母ヨシの長男として誕生。姉4人、すぐ下に弟純二郎、その下は妹2人で、町一番の酒造業を営む家であった。25年2月にその弟が生まれた喜びの中で年末近く祖父弥兵衛が54歳で逝去し、旅館の平沢家の四男であった父は、祖父と共にこそ、兵庫県有馬郡母子村の杜氏である鷺尾久八等を招いてより良い酒を生み出すべき醸造学習研究の努力も出来たのであるが、義父が亡くなるとは、弥兵衛の名は襲名し家督は相続できても、義父の持っていた醸造についての能力やそれに伴う成果と利益を継受することは困難であった。

そこに自然災害が大打撃をもたらした。明治27年8月にそれまでも時々洪水を引き起こしていた横手川(旭川)の大氾濫が起きたのである。皮肉というべきか、「旭川」という銘柄酒を醸造し販売して来た名酒店の下田家も大被害を受けたのである。そしてそこまでなら下田家の産業力が下降するとか縮小するとかという状況だけで済んだかもしれない。ところが明治31年(1898)9月5日、憲一郎の父弥兵衛が39歳の壮年で逝去するのである。数え年10歳の主人公は少年戸主となったものの、当然何もできなかった。財政健全だったのなら、この少年戸主を助けて名番頭振りを發揮してくれる人物も現れたかもしれないが、如何ともし難かった。33年11月に、下田家は家屋敷まで安田銀行の所有となってしまったのである。落ち込んだ母は下田家の一人娘であったのであるが目を悪くし、一番下の六女である明治30年生ま

れのウタという娘と共に夫の生家に身を寄せ、子供達はそれぞれ親類に養われることになった。戸主である憲一郎は、近くの本屋大沢鮮進堂に丁稚奉公をすることになった。

実は36年(1903)3月24日横手尋常高等小学校を卒業している。当然中学校へ進学することも考えていたであろうが、一カ月後の4月26日に夜中四百余軒を消失する横手の大火があり、家屋敷は人手にわたっても、成人した将来自宅の再建を期して大事に保管していた戸障子や、そこで用いるべく保存していた家具などもすべて灰となって消え去ったというのである。当然生きて行くためには奉公もしなければならなかったことであろう。就職先として本人の若者がその気になれば読書の勉強を期待できる大沢鮮進堂勤務は、明治37年(1904)からとされている。

この主人公について正面から「反骨のジャーナリスト 下田憲一郎—横手出身」というタイトルで、昭和62年(1987)9月4日から26日までの秋田魁新報夕刊に10回にわたって記事を掲げた、同新聞社の皆川宏文化部次長の記述によると、「現実には厳しく、下田が奉公した大沢鮮進堂の店先には、時間があると読書にふけている少年時代の下田の姿が見られるようになった。当時旧横手中学の生徒だった能代市末広野四一一七、牧師丹波源一郎(九六)は、少年時代の下田のことを知っている数少ない証人の一人で、次のように語っている。」として、「私の家は大沢鮮進堂のすぐ向かいだったので、よく本を買いに行った。下田さんは店番をしながら、本を読みふけていたのを今でも思い出す。年も私が二歳下と近かったので、よくいろんなことを話し合った。無口なほうであまり多くは語らなかったが、非常に理論的な話し方だった」と記している。そして記者の眼で「この体験が後に下田の反骨、あるいは虚無的ともいえる思想に結びついたように思えてならない」と述べる。そして記事の引用する妹ウタの、昭和52年2月3日付「新婦人しんぶん」の聞き書き「母の歴史」の文として示す「本屋さんでは仕事さえやれば本をいくら読んでも叱られなかったので、兄はずいぶん本を読むことができたようです」を読むと、この本屋勤務は少年の学習にとって極め

て重要な意味を持ったことが理解できる。

明治43年(1910)4月10日、横手の大町下丁に開業の東江堂書店に勤務することになる。大沢亀太郎が設立者であるが、大沢鮮進堂と直接関係はないらしいけれども、下田青年の勤務経験や働きぶりが評価されたものであろう、経営担当であった。実は大沢鮮進堂の名を目にした時、若年教師の頃に史学の講義の受講学生大沢田鶴子という女子学生のことを想起した。現在は詩人の駒木田鶴子氏で、同店が生家であった。そこで基礎学を身につけた下田憲一郎を、館蔵の資料には恵まれなくとも館話で対応しようと考えた一因でもある。

東江堂は、「羽後新報」の広告などによれば、内外書籍雑誌・欧米文房具雑貨・運動用具・西洋楽器類などを扱っていたので、開業一周年の明治44年(1911)4月に、12日の同紙には大売出しの広告で、「景品ノ儀ハ壺等銀側懐中時計ヲ始め総数式千点斬新ナル抽選法ヲ以テ即時ニ御渡可申候」とある、紹介している高島真『追跡「東京パック」下田憲一郎と風刺漫画の時代』(無明舎・2001年)によれば、この文章は「憲一郎の筆によると思われる」という。広告も度々出し、薄利勉強・発送神速・取扱誠実・諸事懇切をモットーとしたと考えられる営業も、この44年9月1日の広告が最終であるという。

東江堂書店は、このあたりで閉店したのかとされる。そして大正3年頃に憲一郎は上京することになる。ここで皆川次長は妹ウタが19歳で兄を頼って上京していることから、8歳年上の兄はその上京を受けた時27歳であり、自身の上京は25～6歳であろうと推計し、「それまで抑えてきた独立への、やみがたい思いのようなものが感じられる」と述べる。だが東京での職業は確定していたのではなく、実態が不明確という諸職業を経験していたと認められ、富山出身の高見之通代議士(弁護士)の秘書をしていたこともあるとされている。何れにしても妹が上京した段階で兄は一応の住居の安定を獲得していたものと考えられる。

妹は横手で15・6歳の頃キリスト教に心を寄せるようになっていて、東京でも兄のもとから教会に通っていた。神学校出の波田高一牧師という9歳上の男性を好きになり兄の取りなしも受けて、

翌年結婚する。まもなく波田は仕事の関係で郷里の山口県の弥富という島根県境に近い村に戻り、ウタも同行したが入籍できたのは大正10年4月で、結婚の失敗に気づき兄にも便し、憲一郎も心配することになる。

ところで下田は内妻と暮らしていたが、皆川次長の母方の祖父と下田は従兄弟で、次長の母は少女時代上京の折何度か下田宅を訪ね、昭和2年女学校2年生の頃には下田夫人に会ったこともある由だが、本来この内妻は家政婦のような立場の人だったので、下田家の親戚たちは家柄などから入籍を認めなかったものらしい。しかし高島は著書の中で「世の権威には屈しない下田憲一郎も、家のなかでは内妻の権威に弱かったといえる」と結論している。そして実は下田が妻に頭が上がらなかったのは、仕事上の財政窮迫が理由だという見方が妥当なようであり、その仕事こそこの主人公を秋田県立博物館が「先覚」として顕彰している原点なのである。「仕事」とは、皆川の記事の題名を構成している「ジャーナリスト」であり、高島の著書の主題名になっている『東京パック』なる風刺漫画誌の編集発行なのである。

そもそも『東京パック』なる雑誌の出現は明治38年北沢楽天の創刊であった。45年5月発売元有楽社の社主と楽天の間が不調和となり、楽天が刊行から離脱し、第二次『東京パック』は新しい陣容で刊行を続け、大正4年まで続いた。

4年経った大正8年(1919)8月第3次『東京パック』が登場し、第2人と本郷で古本屋「三人書房」を開いていた25歳の平井太郎(江戸川乱歩)が、スクラップ的自伝の『貼雑年譜』(はりまぜねんぷ)の中に「『東京パック』ノ権利ヲ下田トイフ人ガ譲受ケテ、漫画会同人達ノ後援デコノ雑誌ヲ出シテキタ。私ハ、アルコトカラ下田氏ヲ知り、ソノ編輯事務ヲ、月給デ引受ケルコトニナッタ。月給ハ五十円デアッタカト思フ」と記している通り3カ月ほどその任に当たったという。

形式的な表示は種々考えられているが、要するにこの大正8年期から下田はパック誌の出版運営に関与したことになる。しかし平井(乱歩)は「三号限りデ月給不払ノタメヤメル外ハナカッタ」と年譜に記している。初めに発行を背負った時から

下田は事業費難だったのであろう。妻に頭が上がりやりにくかったものと察せられる。

大正9年(1920)3月に「東京日日新聞」掲載の「東京パック」の広告によると、東京パック社の住所は、巢鴨宮下の下田憲一郎居所になっており、11月発行の「第一三巻第一号」では明確にその住所になっていて、その状態が昭和10年(1935)まで続くという。そして第一六巻第一号(大正12年1月号)の「賀正」広告には、池部鈞、石井鶴三、池田永治、岡本一平、小川治平、渡辺季作、田村岩三郎、田中比左良、中西立頃、山田みのる、前川千帆、前沢豊三郎、幸内純一、東兵衛、在田稠、青木源太郎、宮尾重男、代田收一、下川四天、下田憲一郎、久松染夫の名が記される。著名漫画家と名を連ね、その位置がいろは順ではあるが、終わりから2番目というところに偶然ながら、彼のこの発行実務の立場が表れているようでもある。漫画といえば意外なことのようであるが、秋田が生んだ平福百穂が、明治45年から大正4年までの第二次「東京パック」に深い縁があった。明治37年に日露戦争で応召の友人結城素明に代わり『团团珍聞』に風刺画を描いていて、長男一郎が「後年、漫画界ニ関係スル始ナリ」(『平福百穂年譜草案』)としているように、漫画に親しい関係にあったので、下田は百穂の助力をも得ていたと考えられている。

だがこの大正12年には9月1日関東大震災が発生する。「東京パック」は当然の如く休刊となる。昭和3年(1928)6月22日第4次の復刊された「東京パック」は、東北の「山形新聞」にも昭和8年(1933)4月上旬まで24回断続掲載されているが、下田が再刊当初から地方への宣伝活動を重視し、郵便で贈書することを怠らなかったのだという。山形の新聞でその事実を明らかにした『追跡東京パック』の著書高島真の父親が、山形新聞社記者で、昭和4年6月9日付紹介記事で「漫画壇新人連が鋭な神経で筆をとっている。…(矢崎)茂四、(藁田)三次郎、(八木原)捷一、…その他十数氏が、各特異な傾向を持って、痛烈に現代社会相をえぐりだしてある漫画満載。」の如く報じられた。7月にも同様の紹介報道に登場する三次郎こそ父親で実名は「高島米吉」といい、23回

ほど同誌に絵を寄稿していたというのである。

高島著者が、この問題に関心を持つのは、昭和9年(1934)4月27日付の父高島へ下田が出した借金「百円」を返し得ない言い訳けと、「毎月二、三百円の赤字に困って居り」という弁明の手紙を発見したことであると書中で述べられるから、先に触れた経営上の財政難は改善の余地のないものだったことが分かる。

昭和5年(1930)早くも5月号が発売禁止になり、12月号は発行禁止となった。時代が変わって行く6年も11月号が発禁になり、7年2月号も発禁で、彼の社会主義を貫く悪戦苦闘は発禁や罰金と戦う中で資金難に陥るのであった。大正とは異なる昭和の国情だった。そしてこの9年には37歳の妹ウタが不誠実な夫と実質的に別れ、学齢に達した娘百合子を伴い東京に戻って来た。しかし兄の内妻の宰領する家庭は安住の場でなく、夫の渡米中山口県でも就業していた教員生活を営むべく、東村山化成小学校に就職し教員住宅に移った。教員資格は横手時代に取得していた。

昭和12年(1937)4月から13年3月まで休刊、もう戦時下の社会では時流を無視できなかった。4月15頁の「銃後の風景号」を刊行した。15年(1940)9月になると内務省検閲課は「左翼出版物治警処分台帳」を作成し処分検討を始め、翌年3月459対象を発禁処分とした。こうなっては結局16年3月に「春の銃後風景号」の「わしが國さの銃後風景・秋田縣の巻」を刊行し、県内各地に取材し秋田弁も積極表記して愛郷心を発揮したというべき、秋田女性表紙の、最終号で刊行の業を閉じる他なかった。

出版の健闘者も、時勢には勝てなかった。生活の為の当時の勤務先の神田の市場から、昭和18年(1943)9月11日に持ち帰ったカニを夕食で食し、12日午後2時20分中毒死した。カニは同じ大家の借家で境の板塀も木戸で通れる隣家にも贈っていたもので、彼本人の料理処置に問題があったための事故であった。まだ54歳だった。せめて戦後まで生きていたらと思う気持ちが切実に生ずるが、内妻の夫人は昭和20年4月空襲で没したというから、結局は彼も同じ戦禍を避けられなかったことであろう。